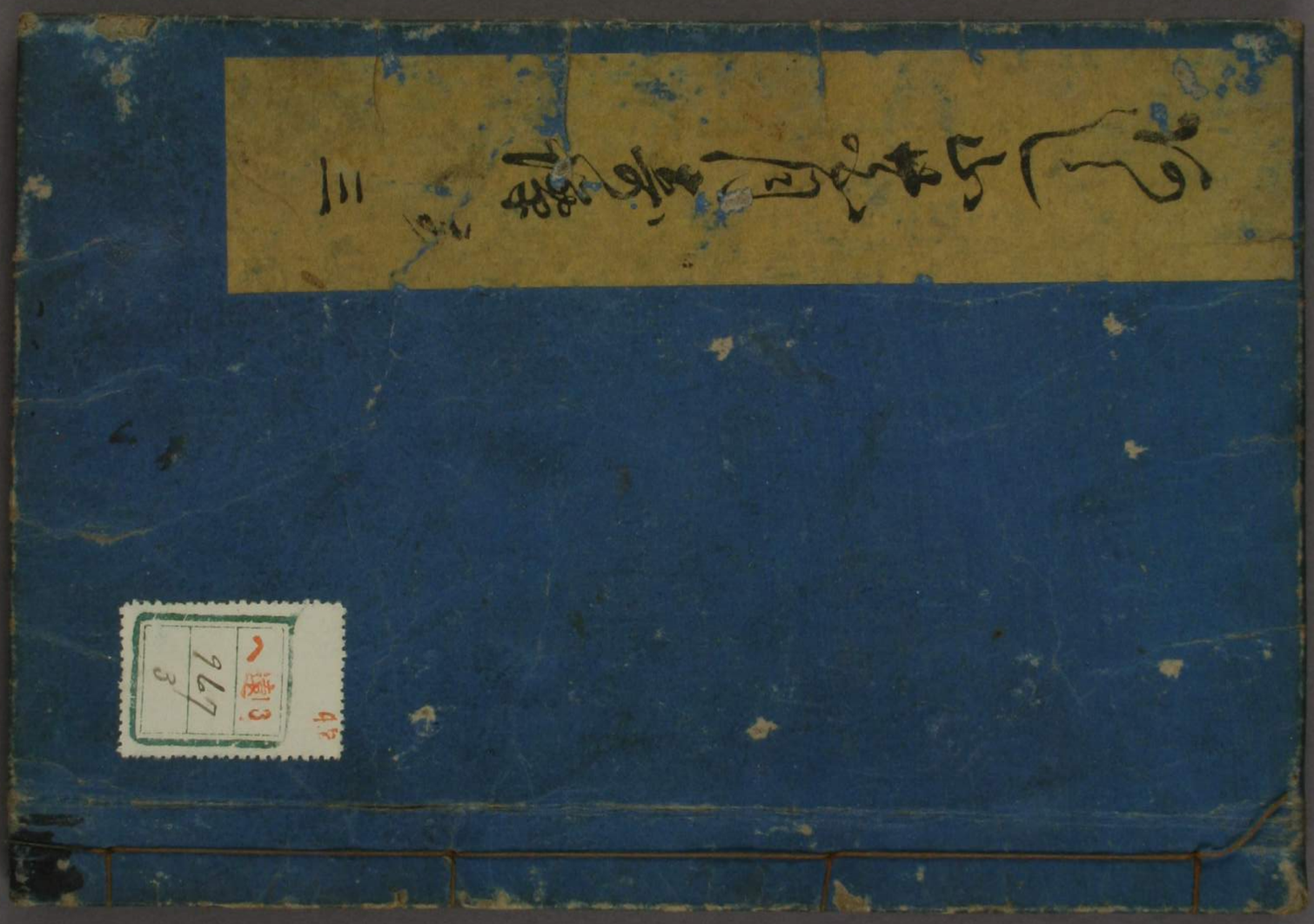


KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT

門遠13
號967
卷3

春清

嵐峽花月奇譚卷之三〇

平安　瀬川恒成著

第二回

善八醉ふて呑介を砍る
秋月怒つて大西と罵る

毎歳五月晦日の夜ハ。感神院の神輿ゆらゝて。神輿を鴨の河原ゆわゝて。洗浄をする。往昔より此嘉例なれバ。今茲も其吏行ひきりる少ど。都鄙の貴賤。老若男女。河原ヒバゝと集り集會て。神輿ゆらゝひと抔見れ。此夜秋月が若黨篠呑介。大西ゞ若黨吉邨善八も。同道て

宝文堂藏

見ふりさつ。躰て神吏も果ければ。河原なる酒店り入く。酣酌献酬飲りるん。互ふ甚く醉けまだ。や退らんと立出けるん。いまゞ叅詣ひ人絶ぬ往もあり皈るもあり。大路ヒまゝ〜とおゝ合ひね。両人ハ醉ふ乗し。最おもしろき吏ふ思ひて。懐中よりさゝ〜ひ手掛ひ。取出しく頬被ヒ。今揉なゞ唄ひ連て。東西と徘徊さるよ。此時梅天仍霖ぶして。泥道ひ滑りなるうへ。雨も来りて。ふり出りれば。叅詣ひ群集ひ衆人皆吾先と押分て。吾家と さゝて急ぐよなん。呑介善八も。是ゞ〜あふ。催促走らんとして徳つて。先ふ立さる篠呑介大地ふ蹉跎ひて。跌き臥ひ。跡より進む善八も。呑介ふ跌づきて。同じく上り轉ひるゝと。見向も中ひ。群聚ひ男女踏こへ刎こへ立りへる。呑介い這ふ起上りて膝と搔撫。声ふり立りやよ善八足下い吾ふ何科有て。羣集さる人中りて。吾とバ突も仆せ〜ぞや。汝り主人い吾主人と。親しく交アをふ也へ。吾も汝もそれふつまて。倶り親しく相譚中。心ふそぬ吏あ〜ば。人なれ処て潜ふ言りぐ誤るべき理ふ〜だ。幾重ふも誤るべく。まゝ言訳もなんべきに。左ハなくて

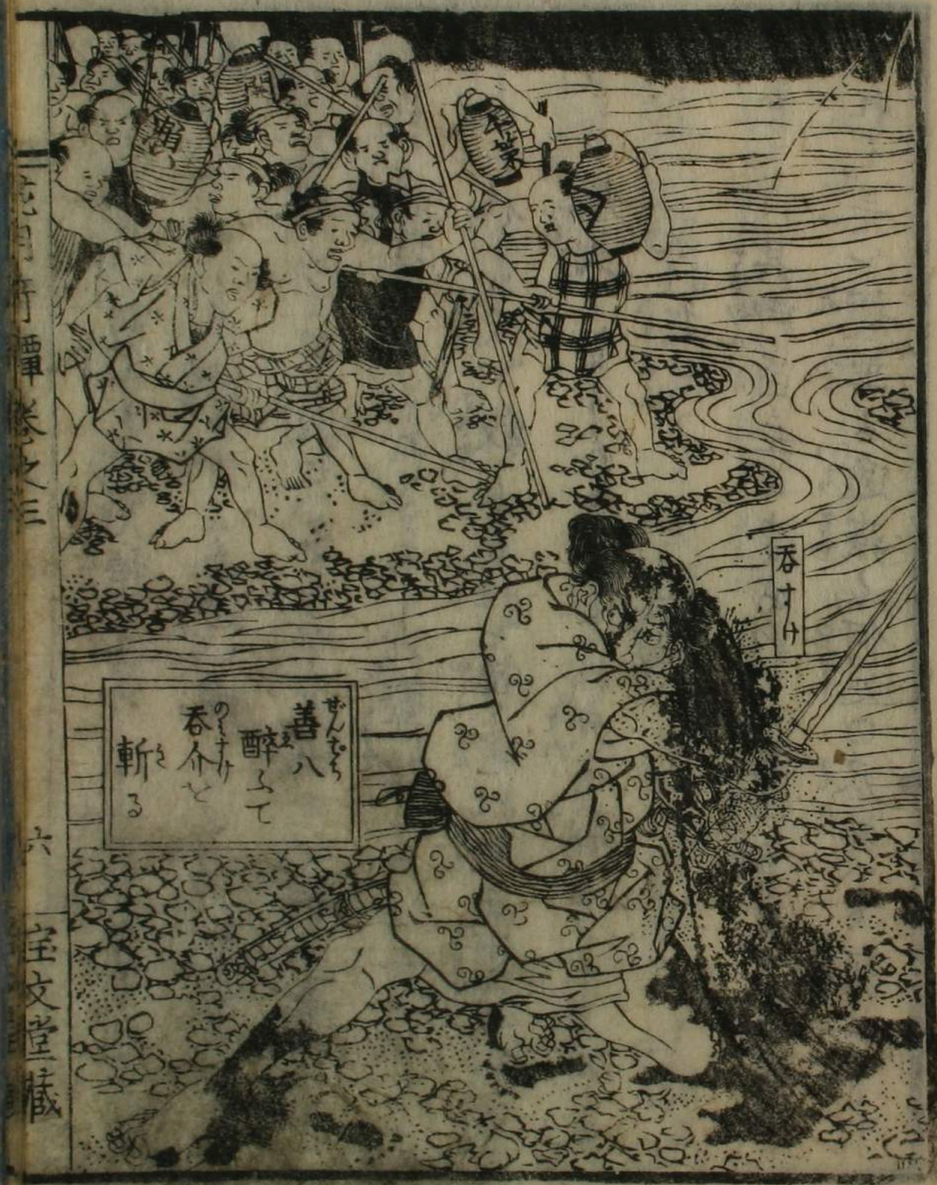
人中ニて斯る耻辱と与ふるい。深き故こそあらんずらめ。言訳ひらぶ疾く言ね。左なくば中く赦さじと切刃まへせば。善八ハ呵こと打ふらいく。是ハ置くし呑介ぬし。足下ハ甚く醉さるよれ。某何の恨有く。足下とハ突仆さんヤ。君羊集ハ人ニ追蒐らまて。足下が先へ仆きしかへ。吾濟も。思ハル足下ニ跌づき。仆きくしくもれなりかし。是ハ〻袴も着物とも。斯まて泥ふ汚せしぞやと。言ひ見すれハ呑介も吾單衣袴とふたに。善八ニハ弥増て。半身泥ニ汚きしり。これと見るより呑介ハ。倍怒て

鞆ふ手とりけっよ醉さりとも常言ニ唱ふるごとく。數をハ忘まじ。僅ハ酒と汝と吾とのみて仆くまで醉んや。泥道ニ突倒し。土足ニよりけて蹴まくしつ。吾ニ耻辱とりらへなくく。嘲弄をることを悪けまと。敦圍りく罵しを敢ハ。腰力晃ふとぬき。無二無三ニ斬て蒐まハ。物ハ騒ぐね善八も。酒ニハ醉つ人中ハて。斯りなる言まて。ハ。腹肚ニすくりね拔合せ。丁く破石と斬合ニぞ。夫喧嘩ニ君羊集ハ人〻八方より寄集會て。此光景とてんもなり。又足ニハ老幼婦女ハ。おどろき懼まて逃るもあり。上と

下へと騒動し。彼両人い些とも撓まず。一上一下に奮激突戦凡半時ばかりふして。送る力や衰へりん。彼方へひけば彼方へ付入。此方へひけば此方へつけ入。善八焦燥て切こむ刀。呑助が運や尽らりん。受外して馬手乃肩さっさ。四五寸ばかり切裂き思へば。跡へ逃廻くところを善八得たりと付入て。丁ど切る白刃に冴よ。袈裟がけ掛むと切さげたり。衆人是を見るよりも人殺しよのがしなせそと。手こふ得物うちふりて。追取まくとすれども。せぜ。右よ左よ突伏せ難ふせ。第邸をさして逃飯る。

此とたまや酔いさめて。後悔すれども其甲斐なし。切腹せんやと思ひしが。只此ふ腹截らば。人狂気とやうしゝ。屋く。主人もいつたら思ぬいん。せ免て此身の死後乃言鮮。書置とさい一毫せん。主人と主人い断金の。親友ふまバ彼も吾も日頃こゝく睦びられども。存外なる今霄の雑言。酔狂なりと志ふ。切害せしい止事を得ざるよりは所為なれども。吾もまゝ酔狂なりきと。独言ゝ硯箱取出して墨をすりぐ。行燈乃灯ゝ。げゝ遺書筆に命毫も。今霄かぎりと覚悟せし心乃

裡こそ勇ましけれ。聽て一昏と云ふ終て。大西夫婦と遥拝し。亡父母の法名唱へ。暇ごひとなり終て。尋常の座とトる既のかゝよとえへる折ゝ。やよまて善八ちやまるゝ。ふと正しく夫人の声音。さして善八座を居直る。彼遺書と懐中へ。ぐゝに間もなく紙門押開け。立出る刀自操女。是い夫人ろ御用あゝば本家へ召いるゝれずゝ。自身来まれいなる故ぞと不審問ひ善八よ。汝い今霄河原にて。をゝ喧嘩などもゝしや。吾済も児女們と連て。潜びやゝに恭信し。先刻第宅へ還るゝ。飯路の後乃ゝ。最さいぐゝうゆへゝ由へ。往来の人ゝとゝとゝへて。第邸ぐゝに家来とゝへて。醉狂して喧嘩ひ。互ふ白刃をうちふりて。ぐゝこ戦ふ者ありとゝゝゝに肌さへとぐろゝゝ。邸も多ゝるゆなれば。誰家に家隷なるゆゝん。汝い平常柔和なる者ゆゝれば。かゝる変いやゝゝゝゝと児女們と。噂なゝゝ家ゝ入ゝて。飯るを待ばまゝ。ゝゝも久ゝゝのゝなゝゝ。飯ゆゝの慌忙ゝゝ。又其ゝと報もせゝ。直地ゝ部屋ゝ入ゝるゝ。故ゝゝゝと推せゝ由へ。若人ゝゝば影護とゝのび



宝文堂蔵

宝文堂蔵

そゝりてそゝぐひんをば。覚悟きはめ〜光景なり。いろある理うれ志〜〇ども。汝が方より絆と釀〜て。喧嘩ひすべくも覚へば。定めてゆうれ出へとあ〜ら。兩刀と佩る身ふ〜られば。道理は叶はぬるあ〜ば。斬捨〜ゝて志ゝうぐ〜し。されども人と殺〜りけと第宅れ裡は匿藏おらむ。いろある難義となゝんも志〜きば。夫も厭ふまあ〜ねども。近来両家み兵乱はゝ。世間穏なゝざれば。主君も邸は在まゝば。其御留主は吏あれて。第一良人が不忠やなれむ。是と纏要は逸疾く。何処の尽処へも落ねゝ〜。

り人志〜ハ便悪〜ゝ。ゝ疾〜と一封の沙金取りゞ〜与ふゝば。善八ハ主恩の厚なゝに感涙とどろゝ〜手と合せ。重ゝ〜ゝ〜おん慈恵。いろハ報ひ奉るべゝ。志意ゝ幸うんハ却て不礼とゆ〜ハ。命をゝ〜せむゞ〜ゝん。麥細ハ言上げ〜ゝ。後はゞゝ〜めさるべ〜。某ゞ日頃の気質ハ。知〜めさゝ〜処なれゞ。此災禍と釀ゝ〜ハ。互の運ハ尽ゝ処御推量ゞゝ〜べ〜。願ふハ相公ハおん許と。夫人よろ〜しくおん取なゝ。ゞゝ〜ゝ〜と〜ゝ声も。なゝゞゝ〜ゝゝと操女ハ。夫ハ気づゝ〜く疾く行ね。ゆゝ〜ゝねゝ〜とゝ

ゲ〜立まバ。善八ハなる〜さもあらば。彼賜と懐中ゐし。脊負い些の風呂〜きづ〜。そい怪れと主恩の重荷ハいづる下さんと。主人の刀自ふ告別して。〜〜第と立出ら。話今両顆秋月ゲや〜れよハ。夜ふくるまでも呑助ゲ。くて来ざると不審よおりくど。善八と同伴て。出往しるなれば。深くうとゲ〜るもなく。若輩入れなるひあまで。白拍子よ心うれて。斯夜と更す。但〜いまと例の酒よ飲ろひく。善八と困らを居る〜ん。早夜半とるられれば。今ハ間よくんて来べ〜と。奴隷どもハ寐もやゲ。

〜〜還て来ば。まで〜ふ其夜も明れば。偖いよ〜青楼よ登て〜〜れうとゲひなし。相公の耳へ入なゲば気ハどくなるるなる〜わと猶もまてども飯らひハ是ハ安〜ぬるよ〜と。やゲて其よ〜訴訟けまば。桂太夫も不審〜つ。やゲく人〜て捜索〜て。要時あるて奴隷等。呑助ゲ死骸を竹輿よ乗せ〜立くて。夕ア河原で喧嘩〜て。同伴なる男ふ此ご〜く。切ころされてさ〜〜ご。切害〜〜〜れ男とバ。恭信ハ衆人ホ。人ごろ〜よ遁れふと。手〜よ得りのと提げて。追取囲て侍〜〜ども。縦横無礙よ切ゆけて。大西

どゝやしたとさゝを逃くるをれよし。甫まゞ相人ハ善八
よりとゞいなくれと。言辭せハしく告るるゞ。桂太夫ハ眉
とをめ。そいとし不審のことなり。善八ゞ柔和る中ゝ
人と害れべき者ゝもるへゞ。況てまゝ。渠と渠といいな
睦じく。ゝるの有べきやうハなし。されども夕ア同道し
て出行ゝるなれバ。假令佗人と喧嘩る。又傷ゝおよゞ
ゝ。見ごろしゝせんやゝもるゝ。此光景ゝなるゝるなゝバ。
疾ゝそまゝれまゞかるゝん。其ことなるゝい不審の一ツ。但しハ
臆病未練ゝして。白双ゝ恐ゝを逃失ゝるゝ。甫まゞ世間の風

聞ゝ相人ハ同伴の男とゝひ。ゝる大西ゞやしゝとさゝゝ
逃入りゝと沙汰するなゝバ。いよゝ渠ゝるゞひなるゝん。
り甫なゝゞ大西より。縄ゝけて送ゝ来れゝ。又ゝゝせ
越れゝまゞかるゝ。其るなれもゝやむべし。彼奴第へゝ
へゝて。已ゞ悪叟ゝ告ざるゝへ則春もゝゝざるゝのゝ。
何ゝるせよ汝ゝ往て。せんぎゝ種の善八ゝ。引ゝゝて来
るべし。催ゝるゝ使せんりのゝ則春ゝ云ゝゝと言ゝく
めつゝいるゞ。奴隷ゝハ心得果て。やゝて大西ゞ邸へゝゝ。
取次ゝ甲乙ゝて則春ゝ言するやゝ。主人清英ゝゝゝ。夜

筑波大学図書館蔵

前手前の家隷呑介。貴殿けの善八と同道しく
うそびふ出。貴殿ゝ家隷と爭論し。遂ゝ切害せられう。
善八第内ゝ侍〳〵ば。此方へ申うけまへりて。家隷ゝ怨
と言まく欲せり。此爰肯引ぬいまうしと。演舌すれば庄
左二門 大西則春 端ちらく立出て。邸へ還りて爾つゝへよ。
御口上義知りね。去らし家隷善八ハ。夕ア出ていまざうへ
らば。そけば御家隷呑助と。殺害しひとゝ等冥ちゝね
家隷ゝ行狀。大気のぞくに存ずなり。當時まてもうへ
らざるい何地へ。逃うせし。但しいとゝもふ死しるう。夫い

弁まへばゆへゝ。吟味して今ふもりまと。飯ゝそゝゝゝゝゝゝゝゝ第
へ送らん。猶貴殿ふも手と配て。よゝ吟味しのへべしと。
返答すれば彼使者い。そゝゝうへて此よゝと。清英ゝ報ず
るゝゝ。清英い数多ゝ人と。東西ゝ手配して。せんぎ大うと
あゝざりる。壁ゝ耳あり石ゝ口ありと。古人のいゝゝゝごと
く。隠まるるゝ顕まて。誰いふとふく善八と。操ゝおとし申り
しこと。世の風聞高りけまば。秋月是と聞つゝへて。噴怒
ゝゝ。両刀跨ゝ。慌忙しゝ。大西ゝ第宅へいゝりゝ。
則春ゝ對面し。佗のことばゝ。おゝばゝし。足下とゝれゝ

桂太夫

秋月怒って大西を罵る
庄左ヱ門

日頃年頃刎頸の良友なれば。家隷ホもこれよつまろく。親睦〻〻相譚あへり。去る而前の夜さり足下が家隷善八。吾倆が家来呑助と。ともふ祇園ヨ糸詣し。其うへヲ路ヨ酔狂して。足下が家僕。吾家隷と双傷よもひ〻〻ひへ。やうたよりが申うけんと。早速人〻て言せしよ。やうきくくざるよいひて。吾と欺き善八ヨ。潜ヨ衆多乃金ヨ与へて。落されるよしたるヨ聞ヲ。往古より喧嘩両成敗い定まる掟なるものと。捉ヨ弁くい上へ不忠又某が家隷と殺させ。吾ヨ恥辱をなくんたるべ。自分ヨけらいり

銀子とけうくして。落されるい。吾倆へ不信。足下がごくくと読昏生。〻〻不忠不義の行跡あるい。吾い一切合点ぬりば。さぐめてふうくと所以くくてあるめ。思ふヨ足下某と。心ふうくむるるむ〻〻ばりて。善八ヨ言ふくめ。我家隷と殺させて。うまくを辱しむるべ。武士ヨ似合ぬ比竟未練。朋友ハ中らひよさくくれあるべきるよいあれ。斯〻不信なる人とい去くく。是まで去くくまぐりしハ。つと〻〻遺憾のかぎりなれば而今以後絶交して。我も来られ足下もまるこ。やうくへ足ふ入ひそと。敦圉悪くのくしを捨て。席を蹴立てうくん

とする。袂を掣へて大西則春夫い短慮なり秋月氏。こゝ
ことなり。先まちよとりつゝよ。清秀倍いりて。絶交しと
れば頓擇あし。言訳くゝみあよびねる。其処をあしね
と焦燥て。ふりたゝふ袂をり。飛ぶる一封見向もやゝず。
足音あゝく。玄関の板敷とゝあゝし。立くる後うげ。
ゝ。大西庄左エ門ぶくを渠ゞ振舞やと。おりへど色
ゝもいゝ。道理ゝね白痴人。言ゝけれも益ゝ
る。絶交せゝゝて幸ひるりとぶゝ中をふゝ飛散ゝ。
ゝ一昏をとり上ゝれば。清英より吾ゝゝ送りこれゝ

標題なり。故あゝゝやと封あゝひとゝゝれば此頃執権蛇
塚我威よはのりて謀反の結構かゝゝゝおりへども。
ゝゝゝ敵ゝゝゝれば。我も足下もゝりて。一味乃
人数よ加ゝれども日頃ゝゝ中らひるれば。邪智ふ
ゝゝ蛇塚父子。足下と吾と喋ゝ合せゝゝへゝ忠をる
ゝめやと。ゝゝゝゝゝ光景ゝり。かゝて万吏影護ゝ。
いゝふもゝ　疎遠よふゝんと。思へど斯までゝゝ江中。
俄頃ゝゝくゝるゝゝば。倍ゝゝゝゝひかゝんと。おりひ
ゝゝふ折ゝもいも。此度は家僕ゞ喧嘩ねゝふてもゝゝ

幸ひ。これさいはひは絶交すれば。彼がうとうひ被むるなく。互ふ心やれうん。今日は不礼の過言足下が言とそ人ざるも。是ホは也へよ〳〵あれば。それ洋君は〳〵ぞとめく心ふりけあ山そ。牡この上も心ふ〳〵。忠勅あそうりのみべ〳〵。我も一〳〵力とつ〳〵〳〵。時とうぐひ奸賊蛇塚。誅罰〳〵国家は災箸。のぞそて後い原のごく。一家はよ〳〵とふ〳〵べ〳〵。最慇懃〳〵昏〳〵れば。則春も左も〳〵と。心はうちふ点頭ぐら。〳〵ぞといりりは面色〳〵。〳〵は昏状と寸〳〵ふ。引〳〵と

もて。不奥けふ已ら居間へぞ入よる。殃秋は頃則春〳〵痢疾は〳〵きひ〳〵く〳〵ふ〳〵〳〵くたりね通忠良篤実の人。国家は〳〵ふ劬労〳〵て。一介の効もふく。泉下の鬼となり〳〵と。最あ〳〵むべきるりる〳〵

花月奇譚巻之三　終